

(巷説)
永井村の兵助

新治村中央公民館資料室

(巷説) 永井村の兵助

兵助の父佐助は農家育ちであったが、妻が弱かったので、永井寺(普門院)が再建された時に、名主の世話で、長男(一人っ子)の兵助を連れて、親子三人で寺の小使いとして雇われた。

当時兵助は九才であったが、生まれつき頭がよく、機転もきまめまめしく働くので、住職からも非常に可愛がられ、寺小僧として採用された。丸坊主になり衣を着て毎朝住職と共に朝の読経するのであった。もちろんその頃は学校が無かったので、一般庶民は学問などは出来なかった。

然し兵助は頭がよい位であったから、住職から手習いをおそわり、十二三才ですでに論語、孟子、大学なども読みこなせるようになった。



母は前にも述べたように病弱であったために兵助が十二才の時に他界してしまった。

兵助や父はどんなにか悲しんだことだろう。その後佐助は後妻(おたね)をめとり、子どもも生まれた。子どもが生まれない前は、おたねの兵助に対する当りはそれ程でもなかったのだが、自分の子が生まれてからは差別をつけ、ことごとくに兵助にあたり散らし虐待するのであった。

兵助はこんな意地悪い継母と同居しているのは、つくづくいやになり一日も早く解放されたかった。

たまたま宝暦年間(二二二年前)に寺の客殿庫裡の附属建物が焼失したので、兵助等の住むところもない有様とな

った。

兵助はこれ幸いと住職や父に相談し、どこか適当な場所へ行って働くことにしたいというと、住職もいたく同情して、いくらかの路銀をくれた。時に年令十七才

あてもなく家を出たが、小さい頃江戸の話を聞いたことがあるので江戸へでも行ったら何とかなるだろうと陸前浜街道を南へ急いだ。

兵助は利根川の渡しをわたり、我孫子の宿場までくると、さすがに疲れ果て、茶店で一休みしていると、小肥りの五十がらみの男が、兵助の側へ腰をおろした。

この男は、江戸深川で木場問屋の主人公太兵衛で、所用あって生まれ故郷の下総国へ来たその帰りがけであった。太兵衛は兵助をじろじろ見ていたが、

「おいあんちゃん、これからどこへ行くんだ。」

「おら江戸へ行くんだ。」

「何しに行くんだ。」

「職をさがして江戸で暮らすんだ。」

「それはいい考えだが、只当てもなく行っただって駄目だ。どうだ、わしの所で働く気はないか。給金も奮発するよ。おめえの体じゃ働けるようだ。」

兵助は別段行く先の当てがあつたわけでないから、早速承諾した。言われるままにその日は我孫子の旅館に太兵衛と同宿した。翌朝早く立ち二人は深川の木場へその日の夕方着いた。



兵助の毎日の仕事は後で運んできた大きな丸太の木材を仲間といっしょに陸上げすることであった。

年の一番若い兵助は朝は早く起き一生けんめい働くので、主人始め兄貴仲間からも可愛がられた。

然し、生まれて始めて水中から陸上げする重労働は並大抵ではなかった。殊に冬は水仕事なので、あかぎれやしもやけで悩まされ、指先などは崩れ落ちそうになってしまった。

◇◇◇◇

兵助はある休日に浅草観音様の縁日に出かけた。参道の両側には、いろいろの露天商が軒を並べおもしろいおもしろい口上で、喉をからしながらまくし立て、客を呼んで売らんとしている商魂を見せつけられた。

これは面白いなあーと思った。

その帰りがけに生ぐすり屋（漢方薬店）へ立ち寄り、しもやけの膏薬を買ってつけたところ、今までぐじゃぐじゃになっていた指が乾いてきた。数日つけたら殆ど治ってしまったので非常に喜んだ。一体こんなに効く薬はどこで作られたのだろうかと效能書を見ると、「製造元常陸国筑波」何んだ生まれ故郷の常陸国ではないか。

そして、やけどしもやけ、あかぎれ、虫さゝれ、たむし、できもの、水虫、しらくも、痔、その他の皮膚病によるしとの效能書である。

これまで筑波山の話は聞いていたが、この效能書と貝殻にはいった膏薬を眺めていると急に筑波山が、生れ故郷の様になつかしくなり行って見たい気持になった。

◇◇◇◇

その矢先木場問屋仲間の講中が筑波参りをすると言うのを聞きその一行に加えてもらうことになった。

一行は神々しい筑波神社に参拝し、それから山登り。山上尾根の参道は険しく、いろいろ奇岩、珍石がそこかしこに起伏して、面白い様相を呈している。

中でも眼の前にぬっと現われた大きなガマ石、頭の上に、多数の小石がのせてある。この小石はおそらく何かの祈願だろう。それと同時に自分のしもやけのただれたようすにも似ている。之等をうまくかみ合わせたらどうだろう。兵助の頭の中には走馬灯の如く、かけめぐるものがあつた。

帰り道中

しもやけ　ー　ガマ石　ー　筑波　ー　陣中膏薬　ー　ガマぐすり　ー　大道で売って見る　ー　しゃべる。

などを交互に言葉、関連などについて頭の中で並べてみた。陣中膏ーガマの油ではどうだろう。

◇◇◇◇

帰ってきてもそのことだけが頭へこびりつき夜もろくろく眠れなかった。

そこで先ず前にも行ったことのある浅草観音様の縁日へ出かけて行って大道商人が、民衆の心理をうまくつかんで言葉巧みに口上よろしく客を呼び寄せ懸命に売らんとしている風景をつぶさに研究した。

帰りがけに薬を大量に仕入れて、一晚中かゝって口上書を作りあげ、みんなの寝静つた隙をみて材木置場へ行って一心に練習した。

まあこれでよいと自信をつけ、早速縁日へ出かけて行って、やって見たが、あがってしまって落ちつきがなく、田舎育ちの悲しさで、ぎごちない、それに方言が多くて自分ではうまくやった積りでも、江戸っ子にはさっぱりわからない様子。

さすがの兵助も、沢山仕入れた薬を前にして、へたばってしまった。よくよく考えたあげく何んとかうまい方法が

ないものかと近所の講釈師のところへ泣きついた。

講釈師は先ず兵助が作った口上をやらせてみた。一生懸命の兵助が喋り終るのを待って

「なるほど、おまえの口上演出では駄目だ。客は寄らない。人をひきつける、目玉言葉が無ければまずい。こんな風にしてみたらどうだろう。」

まず、タラーリ、タラーリと油汗を流す。

トローリ、トローリと煮つめましたるが、陣中膏ガマの油。この辺のところはゆっくりと気分を出して。……取り出したるは夏なお寒き氷のやいば、一枚の紙……六十四枚ふつと散らせば比良の暮雪は雪降り姿。こゝがこの口上の最高潮（クライマックス）だ。いいかわかったか。」

「それから、おまえのその恰好では駄目だ。黒紋つきに白さらしの袴掛、後鉢巻の袴姿。これでやって見ろ。」
講釈師は自分で身振り手振りまでして、口上のやり方を丁寧に教えてくれた。

大道に出た兵助は教えられた通り、竹光に銀紙を貼った刀をふりまわして、盛んに「夏なお寒き氷のやいば云々」をやっている、そこへ江戸町奉行が通りかかり

「これは面白い。これ、大道芸人、苦しくない。町人に佩刀は許されないが、お前がこの場で口上する時に限り、脇差の使用を許可する。」

さあ大へん、大道芸人中兵助だけが佩刀を許されたので、飛び上って喜んだ兵助、早速古道具屋へ駆けこみ、脇差を一本買求めた。今度は本物の刀を使ってやったところ奉行が賞めた大道芸人だとの評判で忽ち黒山のように人が集まり、うわさがうわさと呼んで大道の人気焦点となり、お蔭でガマ油は売れるは売れるは………
大量に仕入れた葉はまたゝくまに売り切れてしまった。

◇◇◇◇

さて、ガマ油の売口上がすっかり板についた兵助は「これからはこれで身を立てよう」と決心して問屋の主人に事情を話して暇をもらうことになった。

然しその頃は兵助も二十二才になり、木場で帳簿係まで仰せつかっていたので、主人も始めは、納得しなかったがとうとう兵助の熱情と評判に負けてしまった。

それから江戸の人気を一身に集め、ふところ工合もよくなり、子どもも成長し、やれやれ一安心という身になった。月日の立つのは矢の如く、江戸へ出てから早四十年過ぎた。(五十七才)

寄る年波はあらそわれず、永年の苦勞で老けこんでしまった兵助は、金にも時間的にも余裕が出来たので、長男の長助を第二代の兵助として襲名させ、自分は隠居の身となり、こゝらで筑波山にお礼参りかたがた生れ故郷永井村を訪ねることになった。

国を出てから便りも無いまゝの四十年、なつかしい山河、寺、人、民家殊に尊敬していた住職、可愛がられた父、一体どう変っているのだろうと六日がかりの道中を心配しながら真先に寺を訪ねてみると、もう住職も父もこの世の人ではなかった。兵助一生のうちでこれ程悲しんだことはないだろう。今は無き二人の霊を墓前にうやうやしく弔らい、淋しく江戸に帰ったという。

◇◇◇◇

その後兵助は、何才まで生きていたかはわからないが遺骨は江戸に墓所を求めて葬むられたが、せがれの長助が親考行だったので数年後遺髪をわざわざ永井寺に持参、祖父佐助の眠っている墓所の側にねんごろに葬ったという。

何時も夢に見たであろう故郷の土にかえった兵助は今も尚草葉の蔭でガマ油の口上を風に託して口ずさんでいるか

も知れない。

註 本文は小学五六年を対象にして書いたものである。

記録によると

永井寺（普門院成就寺）

○ 文明六年（五〇六年前） 建立（西歴一四六九年）

○ 弘治四年（四一九年前） 全焼（“一五五六年）

一七六年間



○ 延享五年（二二九年前） 再建（六角堂大聖院慈芳五世代長意 一七四七年）

○ 宝暦三年（二二三年前） 客殿・庫裡焼失 一七五四年）

○ 本堂は明治初期より末期まで永井小学校舎として使用

○ 本尊不動明王像は全境内のお堂に安置

